

**[D年] 聖霊降臨節第21主日(2024年10月6日)****【旧約聖書日課】ヨブ記 42章1～6節**

- 1 ヨブは主に答えて言った。  
 2 あなたは全能であり、  
 御旨の成就を妨げることはできないと悟りました。  
 3 「これは何者か。知識もないのに  
 神の経綸を隠そうとするとは。」  
 そのとおりです。  
 わたしには理解できず、わたしの知識を超えた  
 驚くべき御業をあげつらっておりました。  
 4 「聞け、わたしが話す。  
 お前に尋ねる、わたしに答えてみよ。」  
 5 あなたのことを、耳にしてはおりました。  
 しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。  
 6 それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、  
 自分を退け、悔い改めます。

**【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 1章12～30節**

12兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。13つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、14主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。

15キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。16一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、17他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせしているのです。18だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでます。これから喜ぶます。19というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。20そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。21わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。22けれども、肉において生き続ければ、寒い多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。23この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。24だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。25こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。26そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることとなります。

27ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行つてあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、28どんなことがあつても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。29つまり、あなたがたには、キリストを信じることでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。30あなたがたは、わたしの戦いをついて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 11章28～44節**

28マルタは、こう言ってから、家に帰つて姉妹のマリヤを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。29マリヤはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行つた。30イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。31家の中でマリヤと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、後を追つた。32マリヤはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。33イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、34言われた。「どこに葬つたのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。35イエスは涙を流された。36ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。37しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と言う者もいた。

38イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。39イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。40イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。41人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。42わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」43こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。44すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ヨブ記 42章1～6節

- 1 ヨブは主に答えた。  
 2 私は知りました。  
 あなたはどのようなこともおできになり、  
 あなたの企てを妨げることはできません。  
 3 「知識もないのに主の計画を隠すこの者は誰か。」  
 そのとおりです。  
 私は悟っていないことを申し述べました。  
 私の知らない驚くべきことを。  
 4 「聞け、私が語る。  
 私が尋ねる、あなたは答えよ。」  
 5 私は耳であなたのことを聞いていました。  
 しかし今、私の目はあなたを見ました。  
 6 それゆえ、私自分を退け  
 塵と灰の上で悔い改めます。

## フィリピの信徒への手紙 1章12～30節

12きょうだいたち、私の身に起こったことが、かえって福音の前進につながったことを、知っていただきたい。  
 13つまり、私が投獄されているのはキリストのためであると、兵営全体と、その他のすべての人に知れ渡り、  
 14主にあるきょうだいたちのうち多くの者が、私が投獄されたのを見て確信を得、恐れることなくますます大胆に、御言葉を語るようになったのです。  
 15キリストを宣べ伝えるのに、妬みと争いの念に駆られてする者もいれば、善意でする者もいます。  
 16一方は、私が福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、  
 17他方は、利己心により、獄中の私をいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。  
 18だが、それが何であろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、私はそれを喜んでます。これからも喜びます。  
 19というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の支えとによって、このことが私の救いとなることを知っているからです。  
 20そこで、私が切に願い、望んでいるのは、どんなことがあっても恥じることなく、これまでのように今も堂々と語って、生きるにも死ぬにも、私の身によってキリストが崇められることです。  
 21私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益なのです。  
 22けれども、肉において生き続けることで、実りある働きができるのなら、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。  
 23この二つのことの間で、板挟みの状態です。私の切なる願いは、世を去って、キリストと共にいることであり、実は、このほうがはるかに望ましい。  
 24しかし、肉にとどまるほうが、あなたがたのためにはもっと必要です。  
 25こう確信しているので、私は世にとどまって、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、あなたがた一同と共にいることになってと思っています。  
 26そうなれば、私が再びあなたがた

のところに行くとき、キリスト・イエスにあるというあなたがたの誇りが、私ゆえに満ち溢れるでしょう。

27ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、私は次のことを聞けるでしょう。あなたがたが一つの霊によってしっかりと立ち、福音の信仰のために心をつ一つにして共に戦っており、  
 28どんなことがあっても、敵対者たちにひるんだりはしないのだと。このことは、彼らには滅びのしるし、あなたがたには救いのしるしです。これは神によることです。  
 29なぜなら、あなたがたには、キリストを信じることでだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているからです。  
 30あなたがたは、かつて私について目にし、今また聞いているのと同じ苦闘を続けているのです。

## ヨハネによる福音書 11章28～44節

28マルタは、こう言ってから、家に帰って姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。  
 29マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行った。  
 30イエスはまだ村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。  
 31家でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がって出て行くのを見て、墓に行き泣くのだろうと思い、後を追った。  
 32マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足元にひれ伏して、「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。  
 33イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、憤りを覚え、心を騒がせて、  
 34言われた。「どこに葬ったのか。」  
 35彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。  
 36イエスは涙を流された。  
 37ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。  
 38しかし、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。

38イエスは、再び憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石で塞がれていた。  
 39イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、もう臭います。四日もたっていますから」と言った。  
 40イエスは、「もし信じるなら、神の栄光を見ると言ったではないか」と言われた。  
 41人々が石を取りのけると、イエスは目を上げて言われた。「父よ、私の願いを聞き入れてくださって感謝します。  
 42私の願いをいつも聞いてくださることを、私は知っています。しかし、私がこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたが私をお遣わしになったことを、彼らが信じるようになるためです。」  
 43こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。  
 44すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

- ・10月6日「聖霊降臨節第21主日」の日課主題は「キリストにある生」。
- ・旧約聖書日課は、「ヨブ記」から、最終章末尾の説話物語に入る前、語りかける主に応答するヨブの言葉の箇所。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、パウロが自らの死生観を述べている箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「ラザロの復活の逸話」本編の終わりの箇所。

**旧約日課(ヨブ 42章より)**

- ・「ヨブ記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)「諸書」に区分される物語詩文書。ユダヤ教では、「詩編」および「箴言」と共に「エメット」と称される詩文書集として扱われる。冒頭1~2章と末尾42章後半に散文形式の説話物語が置かれ、これに挟まれる形で3~42章前半に詩文形式の対話物語が置かれている。対話物語部分は、三人の友人との対話集(3~31章)と、四人目の友人および主との対話集(32~42章前半)の二部に分けられる。本書は、古い時代から知られた「義人物語伝承」をまとめたものと考えられている。前6世紀のバビロン捕囚期にまとめられたとされる「エゼキエル書」には、「ノア」および「ダニエル」と共に「義人」の名として「ヨブ」が挙げられている(エゼ14:14)。ただし、古代イスラエル・ユダヤ教史の中で「義人伝承物語」が隆盛したのは、前3世紀以降のヘレニズム時代、殊に前2世紀、ユダ・マカバイとその一族の指導のもとに為されたマカベア戦争を「信仰に殉じた戦争」と位置づける思想が称揚された時代からだと考えられている。正典所収の「ヨブ記」も、そのような時代に編纂された蓋然性が高い。
- ・日課箇所は、対話物語部分の第二部、四人目の友人および主との対話集(32~42章前半)の末尾を構成する。この対話集部分は、実際にはほとんど、友人と主がヨブに対して一方的に告げる言葉集となっている。その言葉集の中で、ほぼ唯一、ヨブが応答しているとみなせるのが、日課箇所に当たる。
- ・ヨブは、対話物語第一部の三人の友人との対話の中で、友人らによる神学的に根拠のある罪の指摘にもかかわらず、常に自分の正しさと神に対する誠実さを主張し続けていた。それゆえに、対話は常に堂々巡りの様相を呈していた。ところが、日課箇所では、神に対する自分の無知を認め、また自分の罪や過ちを認める姿勢として、悔い改めを告白している。この変化は、本書の物語構成によると、四人目の友人の導きによりヨブが主の言葉を直接聞く者とされたことによって起こったものである。結果的に、最初の三人の友人たちが神学的に指摘したことを、ヨブは受け入れていると言える。このような変化を描く物語構成とされた背景には、箴言の主要提題「主を畏れることは知恵の初め」(箴1:7)と同じ思想があるのだろう。

**使徒書日課(フィリピ1章より)**

- ・「フィリピの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の6番目に置かれた書簡文書。パウロが、独自の宣教団を組織して活動したマケドニア州諸都市で形成された教会共同体の一つに宛てて記したものである。書簡としての様式を備えた一文書としての体裁を保っているが、内容構成に不連続が見られるという指摘から、現代の聖書学者の中には、フィリピの教会に宛てた複数の書簡を編集し直したのではないかという仮説を提案する者もある。ただし、そのような仮説を支持する外的証拠は無く、内的証明も困難である。
- ・パウロが独自の宣教団を組織して最初に活動した地がフィリピであったことを、「使徒言行録」16章は伝えている。フィリピ(ピリッポイ)は、前4世紀中ごろ、マケドニア王フィリップス(II世、在位=前382~336年頃)によって創建された都市。フィリップス王は、弱小国マケドニアをギリシア屈指の大国にし、ほぼすべてのギリシア都市国家を束ねた「コリントス同盟」の盟主としてカイロネイアの戦い(前338年、対アテネ・テーバイ戦争)で勝利したことによってギリシアの覇権を握ったことで知られる。その子が、アレクサンドロス大王。近郊には金鉱山があり、周辺都市国家の中で凶抜けて豊かであった一方、この都市は軍事拠点でもあったため、ローマ軍の侵攻により破壊された。その後、ローマ軍の退役軍人のための植民都市として再建されたため、紀元1世紀当時の主要な住人はローマ人で、ユダヤ人はごく少数だったとされる。「使徒言行録」は、パウロがフィリピ滞在中にユダヤ会堂を活動拠点とできず、随時催されていたと推認される「川岸の祈りの場所」を訪れていたと描いているのは、この都市にまとまったユダヤ人社会が形成されていなかったためであろう。
- ・パウロとフィリピの教会共同体の関係については、本書簡内から知られる事情のほかに、他の書簡にも示唆する言及が見られる(ロマ15:26、IIコリ8~9章)。それによれば、パウロは、フィリピの教会から多額の経済的支援を受けていたと同時に、エルサレム教会に届けるための募金も預かっていた。エルサレム教会への募金は、実際上の困窮に対する支援であると共に、バルナバ宣教団から離脱したパウロが使徒指導集団との関係を回復する意図を示すために、独自宣教団の活動によって形成された教会共同体に協力を呼び掛けたものと推認される。
- ・日課箇所でも示唆されるとおり、パウロは本書簡執筆時、監禁下に置かれていたと推認される。パウロは、おそらくエフェソを活動拠点としていた時期(使徒19章)に、ユダヤ人社会および教会関係者との間で生じたトラブルに関連して、軟禁状態に置かれていた。それが、実際に処刑もありうるような事情の中でのことだったのか、パウロが誇張して死の危機を述べているのか、確かなことは言えない。おそらく、過剰な自意識ゆえの誇張が含まれているのであろう。なお、パウロ

がフィリピンで投獄されていたという逸話が「使徒言行録」16章に置かれているが、その逸話とは本書簡が前提としている背景の事情が異なる。

・13節「わたしが監禁されている」、14節「わたしの捕らわれ」、17節「獄中のわたし」は、ギリシア語「デスモス・ムー」で、直訳すれば「わたしの捕らわれ」。1:7「監禁されている」も同じ表現。「パウロ書簡集」で、「デスモス」の用例は少ない(コロ 4:18「捕らわれの身」、Ⅱテモ「鎖につながれて」、フィレ 10「監禁」、同 13「監禁」)。この語は、必ずしも物理的な「縛り」だけでなく、観念的あるいは比喩的な意味でも用いられる(マルコ 7:35「もつれ」、ルカ 8:29「足枷」、同 13:16「(サタンに)縛られ」、使徒 16:26「(囚人の)鎖」、同 20:23「投獄」、同 23:29「投獄」、同 26:29「鎖につながれること」、同 26:31「投獄」)。

### 福音書日課(ヨハネ 11章より)

・日課箇所は、11:1 から展開する「ラザロ復活の説話物語」の結尾を構成する。同物語の「ヨハネ福音書」全体の中での位置づけは、前回資料「聖書と祈り 240925」も参照。

・「ラザロ復活の逸話」は、「主イエスの復活」を解釈する上での重要な基盤を提供するために置かれている。すなわち、「死と復活」をどのように解釈すべきかを、主イエスが提示して見せてくださっている逸話として、この逸話は提示されている。前提として、主イエスは、ラザロ危篤の報を受けながら来訪を遅らせたが、それは、敢えてラザロの死を待たれていたことであったと、本福音書は描いている(11:15 など)。つまり、「復活」のためには「死」が前提とされ、「死と復活」は密接不可分の事柄として理解されている。それゆえに、日課箇所では、「死」の現実の中に置かれた周囲の人々の姿が詳しく描かれている。

・墓から呼び出されたラザロは、「死」の姿として描かれる(44節)。「(手と足を布で)巻かれた」は、ギリシア語「デオー」で、「デスモス」(上述)の動詞形。

### 来週の誕生日 (10月6日～12日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-83「聖なるかな」(=I546)は、19世紀初頭、オーストリア皇帝ヨーゼフ 2世の教会音楽平明化運動下で、J.ノイマンがミサ典礼文をドイツ語に翻訳し、F.シューベルトに作曲を依頼した「ドイツ・ミサ」の中の一曲。ラテン語典礼では「サンクトゥス」と呼ばれ、感謝の祭儀(聖体拝領)の中で歌われる。
- ・21-79「みまえにわれらつどい」(=II179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美歌で、19世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。
- ・21-376「人の知恵と言葉を超え」は、フィリピンの作曲家フィリシアーノが作詞作曲。フェリシアーノはマニラでアジア典礼・音楽研究所を主宰し、アジアの

伝統的な音楽を礼拝に用いる取り組みを率先している一人。『21』では、豪州聖公会司祭ミンチンが敷衍した英語版から翻訳して収録。

- ・21-411「うたが迷いの」(=I385)は、19世紀デンマークの文学教授・文学者インゲマンが当時用いられていた聖書日課に基づいて待降節第2主日用に作詞。19世紀後半の英国教会司祭ベアリング＝グールドの英訳詞によって英語圏で広く歌われるようになった。曲は、19世紀英国教会信徒の音楽教師バンブリッジが当時の英国皇太子の病氣回復を祝う式典のために作曲したものだが、近年の讃美歌集ではほとんど用いられていない。

#### 21-83「聖なるかな」

### Heilig, Heilig, Heilig! Heilig ist der Herr!

1. Heilig, heilig, heilig, heilig ist der Herr! / Heilig, heilig, heilig, heilig ist nur Er! / Er, der nie begonnen, / Er, der immer war, ewig ist und waltet, sein wird immerdar.
2. Heilig, heilig, heilig, heilig ist der Herr! / Heilig, heilig, heilig, heilig ist nur Er! / Allmacht, Wunder, Liebe, alles rings umher! / Heilig, heilig, heilig, heilig ist der Herr!

#### 21-79「みまえにわれらつどい」

### Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;  
Let us break bread together on our knees.  
*Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the rising sun, / O Lord, have mercy on me.*
2. Let us drink wine together on our knees;  
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
3. Let us praise God together on our knees;  
Let us praise God together on our knees. [Refrain]

#### 21-376「人の知恵と言葉を超え」

### Hindi ko maisip

#### 21-411「うたが迷いの」

### logjennem Nat og Traengsel

English Translation by Sabine Baring-Gould

### Through the night of doubt and sorrow

1. Through the night of doubt and sorrow, / onward goes the pilgrim band, / singing songs of expectation, / marching to the promised land. / Clear before us through the darkness / gleams and burns the guiding light; / pilgrim clasps the hand of pilgrim / stepping fearless through the night.
2. One the light of God's own presence / on the ransomed people shed, / chasing far the gloom and terror, / bright'ning all the path we tread. / One the object of our journey, / one the faith which never tires, / one the earnest looking forward, / one the hope our God inspires.
3. One the strain that lips of thousands / lift as from the heart of one; / one the conflict, one the peril, / one the march in God begun. / One the gladness of rejoicing / On the far eternal shore, / where the one almighty Father / reigns in love forevermore.
4. Onward, therefore, sisters, brothers; / onward, with the cross our aid. / Bear its shame, and fight its battle / till we rest beneath its shade. / Soon shall come the great awaking; / Soon the rending of the tomb! / Then the scatt'ring of all shadows, / and the end of toil and gloom.